



# 日本植物病理学会ニュース 第81号

(2018年2月)

## 【学会活動状況】

### 1. 部会開催報告

#### (1) 北海道部会

平成29年度の日本植物病理学会北海道部会は10月19日～20日の2日間、北海道農業研究センターにおいて開催され、88名（一般60名、学生28名）の参加があった。初日は第224回の談話会が開催され、「ウイルス病研究—最近の研究成果と生産現場での防除対策」というテーマのもと、4名の方に以下のように講演いただいた。「北海道で発生した花きのウイルス病」（堀田治邦氏）、「ジャガイモのウイルス病」（眞岡哲夫氏）、「テンサイ西部萎黄病：過去から現在」（玉田哲男氏）そして「テンサイ西部萎黄病の効果的抑制方法と十勝全域における大規模検証」（三宅規文氏）。この数年間テンサイ西部萎黄病は十勝地方で多発し、テンサイに大きな被害を与えてきた。特に昆虫学が専門の三宅氏の講演は、今年、劇的に発病を抑制することに成功した一連の過程とその間の苦労話で構成され、生産現場での防除対策実施の難しさが改めて認識させられるものであった。2日目の一般講演では、菌類病8題、細菌病3題、そしてウイルス病6題の計17題の口頭発表が行われた。次年度の北海道部会は、平成30年10月18日～19日の2日間、北海道大学農学部において開催予定である。（増田 税）

#### (2) 東北部会

平成29年度日本植物病理学会東北部会は、9月28日、29日に、弘前大学農学生命科学部（弘前市）にて開催され、一般41名、学生43名（合計84名）の参加があった。講演発表は、糸状菌病14題、ウイルス・ウイロイド病11題、植物保護5題の合計30題であり、活発な議論と情報交換がなされた（写真1）。幹事会・総会では次年度部会長に宮城大学食産業学部の中村茂雄氏が選出された。また、本年度の日本植物病理学会東北部会地域貢献賞は、青森県産業技術センターりんご研究所の荒井茂充氏に授与された。

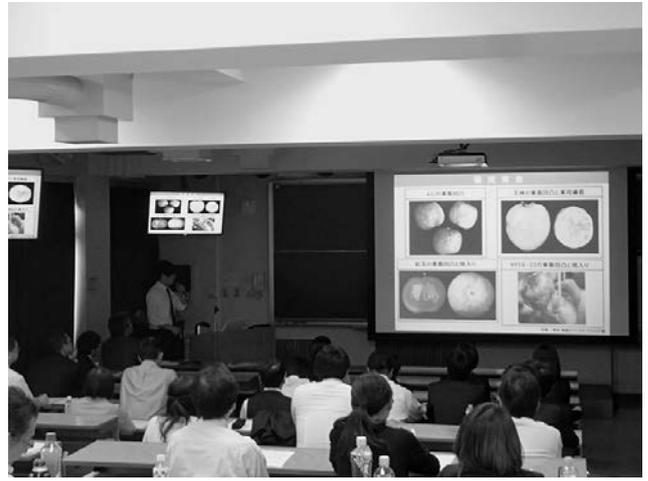


写真1 東北部会 講演の様子

初日の一般講演後にレストランスコーラムにて開催された懇親会では、56名の参加者により活発な情報交換がなされ、大いに親睦が深められた。平成30年度は山形県での開催が予定されている。（田中和明）

#### (3) 関東部会

平成29年度日本植物病理学会関東部会は9月22日（金）、23日（土）の2日間にわたり、昨年に引き続き横浜国立大学常盤台キャンパス（横浜市保土ヶ谷区）の教育文化ホールで開催された。参加者は、名誉・永年会員5名、一般会員95名、学生66名（合計166名）となり例年をやや上回った。講演題数は35題で、その内訳はウイルス・ウイロイド病関係5題、細菌・ファイトプラズマ病関係10題、菌類病関係14題、植物保護・感染生理関係6題であった。各講演の質疑応答も活発に行われ、盛況であった。また、22日午前中の一般講演後には特別講演として、（株）日曹分析センターの佐野愼亮氏に「ウイルス病とアスコルビン酸の葛藤」の演題でご講演いただき、抗ウイルス戦略に関する画期的な取組について紹介があり、大変好評であった。懇親会は、名誉会員の加来久敏氏の乾杯のご発声ではじま

り、和やかななかにも活発な議論・情報交換が行われた。23日の一般講演終了後には同会場において第12回若手の会が開催され、東京農工大の鮎川侑氏による「Fusarium group」と筑波大の別役重之氏による「相互作用」の可視化～出会い系植物病理学のスヌメ～」の講演があり大いに盛り上がった。平成30年度は東京大学担当での開催が予定されている。(平塚和之)

#### (4) 関西部会

平成29年度日本植物病理学会関西部会は、9月19日・20日の2日間、堺市の大阪府立大学中百舌鳥キャンパスにおいて開催された。参加者は258名であった。一般講演に先立ち、役員会および総会において次期部会長に神戸大学の土佐幸雄氏が選出された旨報告があり、承認された。また、次年度の部会は、平成30年9月27日・28日に山口大学吉田キャンパスにおいて開催されることが決定された。総会終了後には、今年度部会長の柘植による部会長講演「宿主特異的毒素獲得による *Alternaria alternata* の病原菌化は適応進化か？」が行われた。引き続き、一般講演が3会場に分かれて行われ、活発な質疑応答が交わされた。講演の内訳は感染生理47題、分類・同定・診断11題、発生生態4題、防除17題、その他4題の合計83題であった。19日の一般講演後には、同じ会場において情報交換会が開催され、活発なディスカッションとなごやかな懇談が行われた。今回の部会は、大阪府立大学東條元昭開催地委員長、望月知史開催地幹事をはじめ大学関係者、大阪府、奈良県、和歌山県の試験場や企業の関係者のご尽力と絶大なご協力によって成功裏に開催することができた。ここに記して、厚く御礼申し上げる。(柘植尚志)

#### (5) 九州部会

平成29年度日本植物病理学会九州部会は、那覇市の「沖縄県立博物館・美術館」において、11月8日に第68回講演会（九州病害虫研究会と共催）が、翌9日に第41回シンポジウムが開催された。沖縄県での開催は、第47回講演会（平成8年度）以来、今回が2回目であった。この間に第55回講演会（平成16年度）も予定されていたが、台風のため会場、日程が変更となったため、久し振りの沖縄県開催であり、約100名の参加者のもとで盛大に行われた。一般講演はウイルス病関連10題、細菌病関連9題、菌類病関連13題、植物保護、耐病性育種、実験手法関連5題の合計37題（内4題は九州病害虫研究会単独講演）であった。これまでの講演会では最高の発表数となり、口頭発表だけでは時間的に十分な発表・議論ができないと判

断され、10題のポスター発表も行われた。合わせて企画された平成28年度受賞講演では、8日に地域貢献賞の吉村大三郎氏（元福岡農総試）から「イネもみ枯細菌病を中心とした水稻病害の発生生態の解明及び防除法の開発」について、9日に地域奨励賞の野口真弓氏（佐賀県果樹試）から「温暖多雨地帯で問題となった果樹病害に対する防除技術改善」について、それぞれ講演があった。幹事会では、庶務会計報告、平成29年度九州部会賞受賞者、地域貢献賞授賞規程の改正、受賞講演及びシンポジウムの開催方法等について審議された。総会では、平成29年度の地域貢献賞は松尾和敏氏（長崎県立農業大学校）、地域奨励賞は澤岬哲也氏（沖縄県農業研究センター）、学生優秀発表賞は玉城優太氏（琉球大農）の各氏が受賞された。9日のシンポジウムでは、3名の方々から講演があった。沖縄県農業研究センター名護支所の澤岬哲也氏からは「マンゴー病害（炭疽病および軸腐病）の発生生態と防除に関する研究」、佐賀大学農学部（日本学術振興会特別研究員）の八坂亮祐氏からは「アブラナ科ウイルスの時間尺度と拡散経路に関する研究」、農研機構・西日本農業研究センターの野見山孝司氏からは「レタスビッグベイン病に關与する媒介菌および2種病原ウイルスの病理学的特性に関する研究」と題して話題提供があり、活発な議論、情報交換がなされた。最後に部会開催にご尽力いただいた沖縄県始め関係各位に厚くお礼申し上げる。次回は宮崎県宮崎市で開催される予定である。(吉松英明)

## 2. 研究会・談話会等開催報告

### (1) EBC 研究会ワークショップ2017

平成29年9月15日10:00～16:30に、EBC研究会ワークショップ2017（第13回）が、東京大学農学部1号館2階8番教室（文京区弥生）で100名余の参加を得て開催された。午前中は第12回日本学術振興会賞並びに第12回日本学士院学術奨励賞受賞記念講演と銘打ち、川口章氏（西日本農業研究センター）による「植物病害ブドウ根頭がんしゅ病の生物的防除法の開発—基礎から応用までを横断的に行った新しい病害防除研究—」と題して、世界初となるブドウ根頭がんしゅ病の実用的な生物的防除法の開発について、種々の苦心談やそれにまつわる裏話等を含め、非常に示唆に富む研究戦略に関する講演が行われた。諸事情があつてしばらく表舞台から離れていた川口氏の久方ぶりの気合のこもった講演に会場全体が大いに沸き立ち、仕切り直しを経た後のより一層の大活躍が期待される講演であった。

午後の第二部は「農業現場における役立つエビデンスを得るためのセンスを磨く」と題した招待講演が行われた。

一番手は馬場友希氏（農業環境変動研究センター）で、「土着天敵が多い農地景観の特徴を探る：景観スケール解析の重要性」と題し、ヒメハナカメムシ類やクモを対象とした研究事例を元に、天敵個体群に対する景観要因の影響を解析する手法についての講演が行われた。害虫学関係者からの講演ということで、病理関係者とは違った視点での考察等が印象深い講演であった。次いで岩館康哉氏（岩手県農業研究センター）から、「夏季のエルニーニョ現象の発生は水稲作柄に影響するのか？」と題し、水稲の作柄とエルニーニョ現象発生との関係を解析し、夏季のエルニーニョ現象発生が直ちに冷害につながるとは限らないとの調査結果が説明された。エビデンスがないまま情報が垂れ流されてきた現状に対して一石を投じる小気味のよい報告であった。

休憩をはさんでの第三部では、現場での近況報告的な5題のショートトークが行われた。1番手は池田健太郎氏（群馬県農政技術支援課）による「ネギ黒腐菌核病に対するシメコナゾール粒剤の防除効果」で、近年北関東を中心に発生が増加している本病害への有効な対応策が示された。2番手は菊原賢次氏（福岡県農業総合試験場）による「観察研究と実介入研究によるナシ赤星病の多発要因解析－DMI剤は効いているのか？」で、観察と介入とを繰り返し、エビデンスの明示、防除対策の構築、そしてその効果の検証というEBCの道順をたどることにより、DMI剤の効果低下の原因解明が行われたことが示された。3番手には森充隆氏（香川県農業試験場）が「ムギ類黒節病に対する種子消毒剤の防除効果の評価」について講演を行った。コムギの細菌病に対する種子消毒剤について丁寧な効果判定試験を行い、今後課題を残す部分があるものの、新たな剤の登録に結び付けることができた事例紹介であった。4番手は七海隆之氏（福島県農業総合センター果樹試験場）による「福島県におけるモモせん孔細菌病の発生助長要因」と題する講演であった。定期調査データとアマダスデータをもとにロジスティック回帰を行い、薬剤散布とせん定の時期の最適な組み合わせを求めるとともに、更なる効率的な防除手法の策定に向けての調査の必要性が報告された。最後の演者は本ワークショップ最初の講演者である川口章氏で、「モモせん孔細菌病に有効な殺菌剤の客観的な選び方－過去データに対するメタアナリシスの適用－」と題し、七海氏の講演に引き続いて防除困難な果樹の細菌病に関する講演が行われた。講演の中では新農薬実用化試験の公開試験成績などこれまでに蓄積された膨大なデータが活用可能であることが示され、これによってしっかりとした解析を行うことにより、有効な防除方法策定のためのエビデンスが得られることが示された。

以上、例年に比べてやや講演題数は減ったものの、あいかわらずの熱のこもった講演と、それに対応する質疑応答が繰り返され、その熱気はそのままワークショップ終了後の意見交換会へ持ち越され、来年へと引き継がれることとなった。今回のワークショップ実施に際しては、快く講師を務めていただいた皆さんや運営に協力を惜しまなかった委員の皆様の大きな協力があったと同時に、一時は開催場所を巡って危機的状況に落ち入りかけたところに温かい救いの手を差し伸べてくださった東京大学の山次先生には大変お世話になった。末筆ながらここに感謝の意を表しこの記事を閉じることとする。（根岸寛光）

## (2) 第11回植物病害診断研究会

第11回植物病害診断研究会は、平成29年11月15～16日に北海道帯広市の十勝農協連ビルで開催された。人口の1/3が札幌市に集中する北海道において、札幌市以外での開催ということで参加者の減少が懸念されたが、関係者の努力により前年並みの117名（会員46名・非会員71名）が参加した。参加者の所属別内訳は、大学8名、農研機構15名、都道府県農試22名、農業改良普及センター17名、農協関係12名、市町村1名、企業39名、その他団体3名であり、植物病理を専門としない方々の参加が目立った。

研究会では、8名の演者による講演と総合討論が行われた。農研機構・北海道農業研究センターの串田篤彦氏からは「ジャガイモシロシストセンチュウ等主要有害センチュウ類の簡易種判定法」と題してジャガイモシロシストセンチュウとジャガイモシロシストセンチュウの高感度検出・識別技術、ネグサレセンチュウ類とネコブセンチュウ類の多種同時検出技術について講演いただいた。北海道立総合研究機構（道総研）・十勝農業試験場の安岡眞二氏からは「畑作物の種子伝染性病害の診断～ジャガイモ黒あし病の例を中心に～」と題して、ジャガイモ黒あし病の病原細菌の学名変更・病徴・分離方法および種特異プライマーを用いたPCR検定について講演いただいた。道総研・北見農業試験場の池田幸子氏からは「つぶつぶ診断・菌核を見つけたとき *Typhula* 属と *Sclerotium* 属」と題して、ニンジン・ナタネの雪腐病菌およびユリ黒腐菌核病菌の分類・同定方法について講演いただいた。道総研・中央農業試験場の山名利一氏からは「ウイルス病の診断～北海道での診断事例から～」と題して、道総研における過去7年間のウイルス病診断事例とその具体的な診断方法について講演いただいた。農研機構・野菜花き研究部門の松下陽介氏からは「侵入警戒を要するウイロイド病害の侵入リスクと診断」と題して、ポスピウイロイドの病徴・宿主・伝染方法・検出手



写真2 総合討論の様子

法について講演いただいた。農研機構・遺伝資源センターの佐藤豊三氏からは「薬用植物にも病害は起きる」と題して、薬用植物病害研究の現状と5種薬用植物（トウキ・ミシマサイコ・カンゾウ・シャクヤク・オタネニンジン）で近年発生が確認された糸状菌病害について講演いただいた。道総研・中央農業試験場の堀田治邦氏からは「あきらめないで！診断の困難な病害に出会ったとき～北海道編～」と題して、ゴボウ黒条病・メロン果実汚斑細菌病・スターチスのウイルス病について、診断が困難であった点や問題解決の突破口となった出来事について講演いただいた。十勝農業協同組合連合会の小澤崇洋氏からは「十勝農協連における病害虫検診事業について」と題して、十勝農業協同組合連合会で実施しているジャガイモシストセンチュウ・ジャガイモそうか病菌・パーティシリウム菌等の土壌検診、ジャガイモの黒あし病・ウイルス病およびコムギ縞萎縮病等の植物検診など病害検診事業の概要について講演いただいた。

総合討論では、農研機構・北海道農業研究センターの佐山充氏の司会のもとで、演者をパネラーとして、病害診断における注意点や診断技術の継承について議論した（写真2）。研究会の運営にあたっては、農研機構・北海道農業研究センター、道総研および十勝農業協同組合連合会の職員の皆様にご協力をいただいた。厚く御礼を申し上げる。なお、第12回研究会は平成30年11月6日に宮崎市で開催される予定である。（三澤知央）

#### 【関連国際会議開催状況】

#### 第4回日韓合同シンポジウムと第7回アジア植物病理学会議報告

韓国済州島の国際コンベンションセンター（写真3）に

て、2017年9月12日と9月13～15日にそれぞれ開催された第4回日韓合同シンポジウムと第7回アジア植物病理学会議に出席しました。

日韓合同シンポジウムは、第1回が韓国済州島で、第2回が福岡市で、第3回が韓国釜山で開催されており、済州島での開催は今回で2回目です。わが国から、60名強の参加がありました。基調講演として、京都府立大学の久保康之博士と三重県農業研究所の鈴木啓史博士のご講演を含む4題の発表があり、2セッションで、我が国からの講演6題を含む12題の口頭発表がありました。英語の講演でしたが、時間をオーバーするほどの熱心な質疑応答が行われました。わが国への侵入が懸念されている火傷病に対する防除システム開発の講演もあり、日韓の植物病理研究者にとって情報交換のよき機会になっておりました。講演終了後には、歓迎会がビュッフェ形式で開催され、翌日からの第7回アジア植物病理学会議の参加者（日韓以外）も加わり、韓国有数のリゾート地での夜を楽しみ、第7回アジア植物病理学会議への英気を養いました。第1回は、済州島北側の済州市での開催でしたが、今回は、済州島南側に位置する風光明媚な中文リゾート地での開催でした（写真3）。高級リゾートホテルは海岸沿いに立地しておりましたが、丘の上にはダウNTOWNがあり、歓迎会終了後には、済州島名物の豚肉の焼肉と韓国焼酎を楽しみにいく面々もおりました（写真4）。

アジア植物病理学会議は、2000年に中国で開催された第1回から、シンガポール、インドネシア、オーストラリアおよびタイで開催されています。台風の接近により、参加者減少が危ぶまれておりましたが、アジア諸国から500名強の参加があり、我が国からは日韓合同シンポジウムに引き続いて60名強の参加があり、開催国である韓国（400名強）に続いて、第2位の参加者数でした。3日間に、基調講演12題、口頭発表32題および各国のカントリーレポート12題があり、分子レベルから圃場レベルまで、多様性に満ちたアジアの植物病理学について、老若男女の植物病理学の学徒が集い、情報交換を行いました。京都大学の寺内良平博士と岐阜大学の清水将文博士が基調講演を、農研機構・中央農業研究センターの津田新哉博士がカントリーレポートで我が国の病害発生状況と防除対策についての講演を行いました。ポスター発表も400題強予定されておりましたが、ポスター未掲載や発表者不在が目立ち、少々、残念でした。本会議の副題「Translation from Genome to Disease Management」が示すように、主催国である韓国の若手による分子レベルでの研究が、これまでの3回に比べて激増しており、基礎研究の現場研究への展開が本会



写真3 会場の国際コンベンションセンター



写真4 済州島名物の焼肉に舌鼓

議の今後の課題になると感じました。その中でも、学生を含めた我が国からの若手参加者が、積極的に質疑応答を英語で行っており、次代のアジアの植物病理学をリードする人材が育っていると感じられました。

最後に、日本植物病理学会員の皆様に重大なお知らせがあります。第8回アジア植物病理学会議を、2020年にわが国で開催することになりました。閉会式に、宇都宮大学の夏秋知英先生（日本植物病理学会長）が、2020年の日本開催を宣言し、アジア植物病理学会議旗を受け取りました。アジアにおける植物病理学の発展に、我が国がどのようにして寄与していくのか、我が国の植物病理学がどのように発展していくのかを、会員の皆様と考えていくうえで、よい機会になります。学生や院生、若い研究者の方々が積極的に参加して、若手からの国際化推進に貢献される会議になることを願っています。（曳地康史）

## 【書評】

西尾 健 監修 堀江博道／橋本光司／鍵和田 聡 編著  
植物医科学の世界 —植物障害の診断を極め、食料・環境の未来を拓く—

B5判, 391頁 2017年4月30日

大誠社 ISBN: 978-4-86518-073-2 C3645 定価 6,481円＋税



この度、法政大学植物医科学センターより、植物医科学叢書の第4弾となる「植物医科学の世界」が出版されました。

これまで世に送り出された同センターによる一連の書籍は、現場で即使えることを重点に内容や構成が作り込まれていますが、今回、届いたテキストを手にした時、この基本理念は継承されながらも、従来の叢書とはやや趣旨が異なることを直感しました。つまり、最初の叢書である「植物病原菌類の見分け方」と、続く第2弾の「植物医科学実験マニュアル」は、いずれも「実験指南書」的な性質が強かったと思われます。一方、本書は、大学での教科書として活用すべきことを念頭に編纂されつつも、それを越えて、既刊の実験書を使いこなし、生産現場で活動する技術者が存分に力を発揮するための司令塔のような役割を持たせているように感じています。

今さら言うまでもありませんが、植物に発生する生育異常は、様々な症状を示し、決して凶鑑通り、教科書通りではなく、よく言われる「典型的病徴（症状）」には、そうお目にかかれるものではありません。若い技術者にとっては、アブラナ科野菜に発生する根こぶ病と、ネコブセンチュウによる被害は明確に区別することさえ難しく、それどころか、マメ類の根に見られる根瘤とさえ混同することもあると聞いたことがあります。これらは決して笑い話ではありません。その違いを明確に、誰でもわかるように答えられるかと言えば、私自身危ういものがあります。

それではもう少しハードルを上げて、トマトの褐色根腐病とネグサレセンチュウの被害を瞬時に、かつ的確に判別するポイントはどうでしょうか？ フザリウム属菌による維管束褐変とパーティシリウム属菌による維管束褐変のそれぞれの特徴と区分点は？ 最近、私が出会った事例として、外見的症状はどう見ても細菌病、あるいはウイルス感染による「えそ症状」で疑いの余地がないトマト葉の異常症状が、病理学的検証を繰り返してもまったく病原は検出

されず、さらに原因を追及した結果、実は深層土壌における極度のマンガン過剰による生理障害であることが明らかとなりました。現場での診断には多少の知見と経験もありましたが、現場での診断技術の研鑽にはまだまだ終わりが無いことを痛感しました。

このように、現場での診断では多くの事例に遭遇し、さらに予想外の要因が関与していることが珍しくありませんが、課題解決へのアプローチやプロセスは、その個々の技術者の独自の感覚により維持、または組織ごとに継承されており、統一的に整理することは困難であったのが事実です。しかしながら、それぞれの知見や経験が一つの学問として体系化され、共有化されることは、全国の技術者の永年の切望であり、それが植物医科学という新しい分野が提唱・創設されるに至った経緯です。

法政大学植物医科学センターによる一連の叢書は、執筆・編集・監修を担われた先生方とともに、現場で活躍してきた多くの技術者の写真や原稿が多数寄稿されています。つまり、各地のベテラン技術者が長年培ってきた現場での知見やテクニクを、わかりやすく体系的にまとめ、全国で活躍する現場の技術者の想いを一つにまとめた書物となっています。このような書籍を教科書として採用すること自体もまったく新しい取り組みとされます。

もう一点、本書を監修された西尾先生は、冒頭に「これまで、生産現場における植物防疫体制は、病害、虫害など特定の専門性に秀でた専任研究員が一つの組織に集合して課題の解決に当たってきたが、近年の異分野間での人事交流、組織の統廃合、人員削減などにより各分野の専門的技術者を配置することが難しくなっており、そのような中、総合診療医に似た能力を持つ人材育成が急務である」と述べられています。

私自身、地方の試験研究機関や病害虫防除所で、一貫して現場での病害虫診断・同定業務や防除対策の構築・実践に従事し、勤務地は島しょ地域にまで及びましたが、いずれの生産現場でも、生産阻害要因が病原微生物である事例、すなわち「病気」は半数程度ではないでしょうか。あとの半数は、虫害であったり、あるいは薬害、最も悩ましいのは肥料、微量要素やガス害などに起因する生理障害でした。

先に書きましたように、実際の生産現場では様々な要因により、植物の生育異常が発生します。しかし、生産者にとって重要なことは、その要因が病気なのか虫害なのか、あるいは生理障害なのかといった、生産阻害の根本原因と対処法であり、診断に当たった技術者の専門性や見解を求めている訳ではないのです。

一つの事例として、生産者から「病気であるか？」との

問いに、「病気ではありません」と答えます。当然生産者は「では何が原因か？」と聞き返す訳ですが、「病気以外は専門でないのだからわかりません。とにかく病気ではありません」

このような問答は、私の身の回りにおいても決して特異なことではなく、これが西尾先生の執筆にある「特定の専門性に秀でた専任研究員が一つの組織に集合して課題の解決に当たってきた」ことについてのある種の弊害なのだと思います。

先に書きましたトマト葉の生育異常は、菌類・細菌類の分離を繰り返して、ウイルス検定も実施しましたが、すべて空振り、さらにウイルス学の権威であられる、ある大学の先生にご意見を伺い、疑われる病原ウイルスの検出をお願いしましたが、それでも陰性でありました。私が植物病理という専門性に固執するならば、診断はここまでであり、トマト生育異常は原因が究明されるまでさらに時間を要したでしょう。しかし、一連の診断プロセスから、現場に立ち戻り、圃場内で症状に感染性が認められないことから、生理障害の面から再度アプローチし、異常植物体の保持と、栽培終了後にバックホーで栽培土壌を層ごとの1mまで掘り下げ、採取土壌を私どもの土壌肥料研究チームにて分析を行い、ようやく原因究明に到達しました。

少々大仰に書きましたが、このようなことは現場で診断に当たっている多くの技術者は当たり前のように行ってきたことです。しかし、いま改めて思うこととして、現場の技術者に求められる本当の資質とは「生産阻害の原因をとことん追及すること」であり、それは病害、虫害、その他生理障害の垣根を越えた、一切切の生産阻害要因を横断的に包括し、自身で診断する高い意識を持ちながら、時に異分野を総合的にコーディネートできる人望・人脈と考えます。

このような理念に基づき、植物医科学に関する叢書の出版が積み重ねられ、ついに本書をもって、植物医科学という学問の俯瞰とその普及へと、さらなる発展に傾注される先生方の想いが明確に示されたと思います。

私どもは法政大学応用植物科学科(旧：植物医科学専修)とは、教員の先生方には共同研究の形でご指導を受けながら、当方からは現場での視点から、問題点・解決への工程などを提案し、植物医科学の発展・応用に提言をさせていただいてきました。その一環として、学生さんには東京都の現場における数々の課題を担当してもらい、優れた成果を現地に還元すると同時に、学会発表、論文執筆といった学術的分野にも積極的に参画し、さらに、卒業後は多くの学生さんが植物医科学に関連する分野で活躍されています。

本書の巻頭には、相変わらず豊富な写真が「これでもか」と言うほどのページが割かれています。私も微力ながら参加させていただいておりますが、このような「現場的な写真」をまとめて見る機会は少ないと思います。各叢書のカラー口絵は最大 90 ページ（本書は 29 ページ）にも及び、学生さんには「過剰サービス」とさえ思えますが、学生さんが社会に出て植物防疫関係の職に就いたとき、改めて大学で学んだことの有り難さに想いを巡らせ、活躍してくれることと期待しています。

本書は、監修・編著者の先生方と想いを共有する全国の技術者たちの集大成です。専門性に関わらず、植物の生産・管理を生業とするすべての方々に手に取っていただきたいと思います。（東京都農林総合研究センター 星秀男）  
（お詫び）

本書評は 79 号（2017 年 8 月発行）に掲載しましたが、文末 3 段落の落丁が判明いたしました。つきましては、本号に落丁箇所を加えた全文を再掲載させていただきました。著者、関係者の皆様にご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。

#### 【会員の関連学会等における受賞のお知らせ】

志村華子氏（北海道大学大学院農学研究院）が、第 14 回（平成 29 年度）日本学術振興会賞を受賞されました。本賞は、創造性に富み優れた研究能力を有する若手研究者を学術振興会が顕彰する賞です。受賞対象となった研究業績は、「植物ウイルスの病徴誘導における RNA サイレンシングの関与とサイレンシング制御による抗ウイルス剤の探索」です。

#### 【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたく願います。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内  
学会ニュース編集委員会  
FAX：03-5980-0282

または下記学会ニュース編集委員へ：

高橋賢司、鈴木文彦、池田健太郎、平塚和之、山内智史

#### 編集後記

新年おめでとうございます。新年にあたり、会員皆様のご健勝と学会の益々の発展をお祈りします。

学会ニュース第 81 号をお届けします。本号は、部会の開催報告を中心に掲載しました。

北海道、東北、関東、関西、九州、いずれの部会も多数の参加者で盛會裡に開催されました。北海道部会ではテンサイ西部萎黄病などのウイルス病をテーマにした談話会、関東部会では抗ウイルス戦略への取り組みを紹介した特別講演、関西部会では柘植部会長による特別講演が行われています。また、東北部会では地域貢献賞の授与、九州部会では地域貢献賞などの授与とその受賞者による講演に加えてシンポジウムも行われています。いずれの部会も、一般講演やポスター発表での活発な質疑応答や議論とともに、運営やプログラムの工夫によって大変有意義な会となったようです。開催にご尽力いただきました関係の皆様へ厚くお礼申し上げます。

EBC 研究会ワークショップが 9 月に東京大学で、また植物病害診断研究会が 11 月に北海道の帯広市で行われました。両会とも参加者は 100 名を超え、興味深い講演と話題提供を受けて熱心な質疑応答、討論が行われたようです。会の開催や運営にご尽力いただきました関係の皆様、またご参加の皆さまに、学会活性化へのご協力に感謝申し上げます。

韓国の済州島で開催された日韓合同シンポジウムとアジア植物病理学会議参加の報告を曳地先生からいただきました。日本からも開催国の韓国に次ぐ 60 名以上の参加があり、両会ともに日韓、アジア各国間の植物病理研究者の情報交換のよき機会になったとのこと。次回 2020 年のアジア植物病理学会議は日本で開催されます。若い研究者をはじめ多くの会員の参加が期待されます。

うれしいお知らせです。志村華子氏が日本学術振興会賞を受賞されました。誠にありがとうございます。これからの益々のご活躍とご発展を祈念申し上げます。

本年も本欄では学会関連の各種の多様な情報をご提供したいと思っています。引き続きのご愛読と情報の提供をお願いいたします。（高橋賢司）